

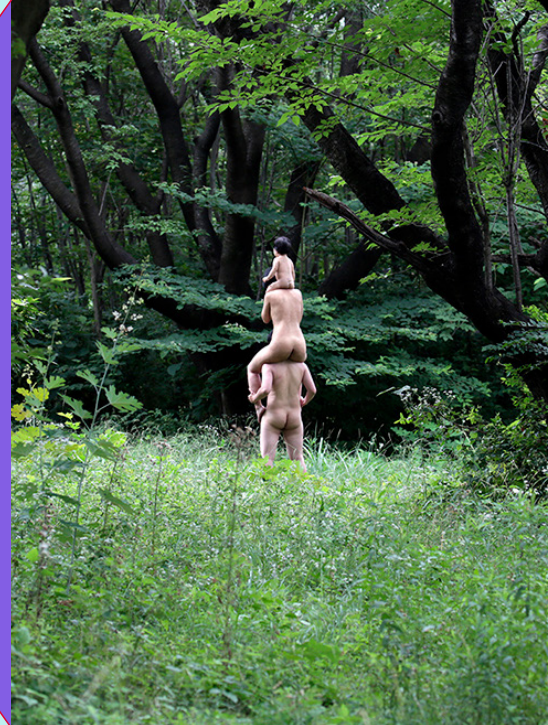
津野青嵐

二藤建人

ボディ、大丈夫です Body, I'm Fine Body, I'm Fine

Seiran Tsuno

Kento Nito



2026年11月 3日(火)祝一
2027年 1月11日(月)祝
Tuesday, November 3, 2026–
Monday, January 11, 2027

せんだいメディアテーク 6階ギャラリー4200

11時から20時 (入場は19時30分まで)

*11月26日(木)、12月29日(火)～1月3日(土)は休館

入場料: 一般500円、高校生以下無料

(65歳以上の方、障がい者手帳をお持ちの方は半額)

主催: せんだいメディアテーク (公益財団法人仙台市市民文化事業団)

助成: 一般財団法人地域創造、芸術文化振興基金

協力: LEESAYA



smt

「大丈夫です」。やんわりとした拒否によって他人との摩擦を減らし、なめらかな関係性を維持する便利な言葉です。同時に、相手の領域へ踏み込むことも自らの内面を開示することも避ける、防波堤のような役割を果たすこともあります。近年のこうした言葉遣いに見られるように、わたしたちは身体性を伴った他者との関係を簡略化し、将来的に取り除こうとしてはいいのでしょうか。さらに、AIの進化が示すように、わたしたちは自らの身体を取り囲む数多くの事柄との折り合いを外部に委ねようとしています。本展では、そうした方向に進む社会のなかで、自らの身体をつうじて他者との色濃い関係を構築しようと模索する2人の作家・津野青嵐と二藤建人を紹介します。

津野青嵐はこれまで、衣服づくりや身体経験をめぐる実践、執筆など分野を横断しながら自身の身体との付き合い方を探求してきました。看護師でもある津野の表現は、ケアを介した他者の存在とともに、ケアする側とされる側の関係は一方方向ではないことを描写しています。《Walking With》では、津野が巨大なドレスを背負いながら友人たちのサポートによってどうにか歩みを進める姿から、他者なくしては成立しない身体のあり方を明示します。

二藤建人は彫刻制作を起点にしながら、多様なメディアを用いて表現を続けてきました。《誰かの重さを踏みしめる》のように、重さを受け止めて支え合い、自他の関係性を身体で感じ取ることを焦点化してきた二藤の関心は、自ずと実母や配偶者、実子へと及びます。近作では、子育てのさなかで生まれる戸惑い、親という役割によって変化していく「わたし」と家族の関係性を問うています。

津野と二藤は、意識による身体制御のむずかしさや、環境による変化など、自らの身体の困難な側面を知るところから探求をはじめ、その先で、他者との関わり合いへの気づきを得ています。2人の表現は、他者を遠ざけるためではなく、「大丈夫」と自らの身体を肯定することで、他者と深く響き合うための確かな手がかりとなるでしょう。



津野青嵐 (つの せいらん) Seiran Tsuno

1990年生まれ。2026年東京科学大学大学院修了。看護師として訪問看護をおこなう傍ら、衣装などの作品制作に取り組む。これまで山縣良和主宰の「coconogacco」や、当事者研究発祥の地である北海道「浦河べてるの家」などでリサーチや制作を続けてきた。主な展覧会に「Costume Art」(メトロポリタン美術館、ニューヨーク、2026)、「アベルト20 津野青嵐 共にあれない体」(金沢21世紀美術館、2025)、「南飛驒 Art Discovery」(2024)など。

表紙左側上より
《Walking With》(2025) Photo by 大町晃平 (W)
《ねんねんさいさい》(2024) Photo by 津野青嵐 (FUJI TEXTILE WEEK 2023)
このページ上より
《The Wishing Table》(2024) Photo by 大町晃平 (W)
《Out of Body, In Dress》(2025) Photo by 大町晃平 (W)
《おきやくさま おごっつおう 食べてくりよ》(2024) Photo by Osamu Nakamura
(提供:南飛驒Art Discovery)



二藤建人 (にとう けんと) Kento Nito

1986年生まれ。2012年東京藝術大学大学院彫刻専攻修了。触れえぬ他者との境界や、重さを可視化する表現者として知られ、彫刻や写真、映像、インスタレーションなど幅広い表現方法で作品制作に取り組む。主な展覧会に「私たちのstandpoint」(Art Center Ongoing、東京、2026)、「ケアリング／マザーフッド:「母」から「他者」のケアを考える現代美術」(水戸芸術館現代美術ギャラリー、2023)、「私と世界を隔つもの」(LEESAYA、東京、2021)など。

“I’m fine.” A convenient expression of soft refusal that reduces friction with others and keeps the relationship smooth. At the same time, it acts like a breakwater that avoids incursion into the other’s domain and disclosure of your own inner thoughts. Doesn’t the growing use of such expressions in recent years suggest that we are simplifying relations with others that are accompanied by physicality, and may eliminate them further in the future? Moreover, as indicated by the evolution of artificial intelligence (AI), we are increasingly trying to leave relations with many matters surrounding our own bodies to external entities. In the midst of a society headed in such a direction, this exhibition introduces the works of Seiran Tsuno and Kento Nito, two artists who are exploring ways of constructing deep connections with others through their own bodies.

Thus far, Tsuno has pursued modes of association with her body through activities spanning fields such as artistic practice and writings revolving around dressmaking and bodily experience. She is also a licensed nurse, and her expression, besides depicting the existence of others through care, shows that the connection between the care givers and the receivers is not one-way. In Walking With, she portrays a woman burdened with a huge dress who somehow manages to walk with the support of her friends. The work clearly shows the state of the body, which cannot subsist without others.

Kento Nito started out making sculptures, but has since continued to express himself in a variety of media. As exemplified by Steps on Someone’s Weight, in which one person receives the other’s weight and the two support each other, Nito has focused on feeling the relationship between the self and others with bodies. His interest naturally extends to his mother, spouse, and child. In his recent works, he presents the perplexity born in the midst of child-rearing and raises questions about the relationship between the self and the family, which changes along with the parental role.

Tsuno and Nito launch their quests from knowledge of the troublesome aspects of their own bodies, such as the difficulty of bodily control by the consciousness and changes caused by the environment. In these quests, they obtain realizations about involvement with others. The modes of expression by the two are bound to provide sure insights for deep resonation with others by mutually affirming bodies as “being fine” instead of keeping others at a distance.

表紙右側上より
《私の愛は私の重さであるー森の家族ー》(2015)
《誰かの重さを踏みしめる》(2016–2021) Photo by Rentaro Hori
このページ上より
《前人未踏の帰り道》(2018)
《Mother and son》(2012)
《私に母の服に世界》(2012)

関連イベント

展示作家と担当学芸員によるギャラリーツアー

*申込不要、先着30名

*詳細は展覧会
ウェブサイトにて更新中



11月3日(火) 14:00-15:30

*当日分の展覧会半券が必要です

*参加にあたり手話通訳をご希望の方は、準備の都合上10月15日までにメールにてご連絡ください。

ゲストトーク

*申込不要、参加無料、先着30名

11月15日(日) 14:00-16:00

出演: 小林耕平、二藤建人

場所: 6階ホワイエ

*参加にあたり手話通訳をご希望の方は、
準備の都合上10月31日までにメールにてご連絡ください。

小林耕平(こばやし こうへい) Kohei Kobayashi
1974年生まれ。美術作家。埼玉県を拠点に活動。主な
個展に「テレポーテーション」(黒部市美術館、2022)、
「ゾ・ン・ビ・タ・ウ・ン」(ANOMALY、2019)、「あくび・指
南」(山本現代、2018)、「バランブセスト 記憶の重ね
書き vol.4.小林耕平」(galleryaM、2014)。武蔵野
美術大学油絵学科教授。

11月21日(土) 14:00-16:00

登壇: 伊藤亜紗、津野青嵐

場所: 6階ホワイエ

*参加にあたり手話通訳をご希望の方は、
準備の都合上11月5日までにメールにてご連絡ください。

伊藤亜紗(いとう あさ) Asa Ito
1979年生まれ。美学者。主な著書に『体の居場所を
つくる』(朝日出版)、『どるる体』(医学書院)など多数。
第13回(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞、
第42回サントリー学芸賞受賞。東京科学大学未来社
会創成研究院／リベラルアーツ研究教育院教授。



ご案内

- 鑑賞にあたり個別の情報保障や配慮を希望する方は、
メールまたは電話にて事前にご相談ください。
- 同時開催
定禅寺アートストリート2026-2027 定禅寺通近辺(佐々瞬ほか)
オン・デイズ・グレイ 館内無料常設展示
(青野文昭、川俣正、志賀理江子、ダダカン連)

この紙はリサイクルできます

お問い合わせ

せんだいメディアテーク企画・活動支援室
sendai mediatheque

〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1
2-1 Kasugamachi, Aoba, Sendai,
Miyagi Prefecture 980-0821

Tel: 022-713-4483

Mail: office@smt.city.sendai.jp

てつがくカフェ

*申込不要、参加無料

「てつがくカフェ」は、通常当たり前だと思っている事柄について「そもそもそれって何なのか」と問い直し、参加者どうして「対話」を重ねることで、最終的にそれらに関する個々人の考えをたくましくしていくことを目的とした試みです。

11月28日(土) 14:00-16:30

「展覧会『ボディ、大丈夫です』から考える」

11月29日(日) 14:00-16:30

「展覧会『ボディ、大丈夫です』からもっと考える」

進行: 西村高宏、近田真美子

場所: 6階ホワイエ

*どちらか1日のみの参加可

*参加にあたり手話通訳をご希望の方は、
準備の都合上11月13日までにメールにてご連絡ください。

西村高宏(にしむら たかひろ) Takahiro Nishimura
大阪大学大学院人文科学研究科准教授。専門は臨床哲
学。2011年東日本大震災以降、多くの被災者らととも
に、震災という出来事に対話をとおして自分たちのことばで
語り直すための場として「てつがくカフェ」を拓いてきた。

近田真美子(こんだ まみこ) Mamiko Konda
大阪成蹊大学看護学部教授。専門は精神看護学。西村
らとともにてつがくカフェを拓き、参加者の語り、対話を可
視化するファシリテーション・グラフィックを担当してきた。



申込フォーム

ワークショップ

11月1日(日) 13:00-16:00

「私たちのstandpoint」

*完成次第解散

二藤建人作品「standpoint」を展覧会設営会場で
参加者の皆さんと制作します。

場所: 6階 ギャラリー4200

対象: 作家の指示にそって石膏を触る、一定時間じっとする、
脚立をのぼる動作が可能な方などたでも

*親子での参加大歓迎
*要事前申込、参加無料、先着50名

smt